

■平成17年度 一般入試（後期）（論述）

問題1：次の文章は写真家の撮影記録・印象記である。アンダーライン（二ヶ所）の語句を、具体的な撮影場面に即して、写真家の撮影姿勢（方法論）を示す言葉として説明しなさい。（300字以内）

高見 順

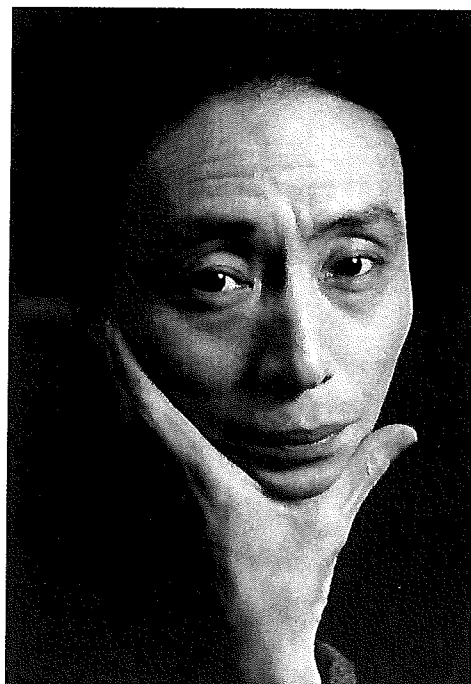
「土門拳氏にはじめておめにかかったのは昭和十年頃であった。武田麟太郎氏の紹介で、私の顔を撮ってみたいというから、写真を普通撮られる場合のポーズをとると、土門氏は文学論などするだけで、一向に撮ろうとはしない。撮らないつもりかとポーズを崩したら、途端に阿修羅のように撮りはじめた。そして帰り際に、おでこが結構でしたという。まことに無礼な人物であった」。——これは高見さんがぼくについて書かれた「十五年前のこと」という文章の一節である。その十五年前、ぼくは大森の海岸寄りにあった高見さんの自宅を訪ねた。ぼくは無名の一写真青年、高見さんは長編「故旧忘れ得べき」を発表して、文名^{さくさく}たる新進作家だった。新婚早々で、丸ぼちゃの美しい奥さんがぼくにはまぶしかった。カメラはライカDⅢズマール付だった。紫檀の仕事机に肘ついた高見さんにカメラを向けると、高見さんはやたらに照れて、眼をどこに向けたらいいのか、手をどこへ置いたらいいのかと、まるでお神楽のヒョットコ踊りのように身もだえされるのであった。ぼくは一切ポーズの指定も注意もせず、パシャ、パシャと非人情にシャッターを切り続けた。その度に高見さんは「へええ」とか「ひゃあ」とかと奇声を発しておられた。確かライカ二本は撮った筈である。帰り際に「おでこが結構でした」なんて失礼な挨拶はしたかどうか覚えていないが、多分したであろう。——今度、十五年振りに高見さんを撮ったわけだったが、カメラを向けてみて、高見さんが人間的にまるで成長しているのに驚いた。高見さんは新聞の連載小説を書いていた。その右肘すれすれにローライの三脚を据えたが、高見さんはカメラなど全然眼中になく、せっせと原稿を書いていられた。ぼくは原稿を書いてられるままや、レンズの方へ顔を向けたところなどを例の如く非人情に何枚もシャッターを切ったが、高見さんはシャッターの音をガラス窓を這う蠅の音ほどにも気にとめていられなかった。三畳の狭い書斎の中で、高見さんは高見さんで小説を作っており、ぼくはぼくで勝手に写真を撮っているのだった。撮られる人と撮る人のそういう関係こそ、撮影の最上のコンディションである。尤も最上のコンディションが必ずしも最上の写真を生むとは限らないが。——今度は帰り際に「おでこが結構でした」などと、ぼくは決して言わなかった。

昭和二十三年（1948）二月二十七日 鎌倉市大船町山ノ内・自宅

ローライ・フレックス テッサーF3.5 富士ネオパン プロクサー2号 室内自然光 絞F11 1/5秒
(土門拳『風貌』より)

*ローライ・フレックス：6×6判二眼レフカメラ テッサー：レンズの名称 プロクサー：接写用補助レンズ

問題2：問題1の文章を参考にして、この肖像写真について考察しなさい。（600字以内）



土門拳「高見順」
写大ギャラリーコレクション